

# 文化財調査報告書

調査日：平成22年12月3日

- 1 種 別 天然記念物
- 2 名 称 神崎森
- 3 指 定 年 月 日 昭和10年8月23日
- 4 所 在 地 神崎町神崎本宿 1944
- 5 所 有 者 宗教法人 神崎神社

## 6 調査までの経緯：

平成15年度にNPO法人「樹の生命を守る会」が、県内の指定・未指定を問わず巨樹の樹勢調査を行った。その際この樹林は「階層分化が進み下層植生が豊富であり、極相へ移行しつつある森林」とされている。一方、南側に多いスギの大木群が衰退、枯損しているとの指摘が神崎町文化財審議会委員長の磯辺大暢氏よりあり、今回森林の状況の観察、周辺環境調査を行った。

## 7 現状及び取り扱いの留意事項

神崎森は、沖積平野の中に取り残された島状の台地で、周囲は急傾斜危険地に指定され、コンクリートによる斜面補強工事が行われている。

南側の正面の鳥居から急な石段を登りきったところに、小さな祠（愛宕神社：南の別の島状台地（愛宕山）からここに移転されたもの）があり、さらに平坦な尾根上を進み、東西からの歩道と出会う峠状の部分を超えて、石段を登りきった頂上部の台地面上に神崎神社の社殿がある。社殿の東側には国指定天然記念物「神崎の大クス」（「なんじゃもんじゃ」）がある。大クスは本来の主幹は明治40年の社殿火災のため焼失したが、現在も切断された主幹が腐朽しながらも原型をとどめている。その周囲の4本の萌芽幹が既に大木となっており、それぞれ樹冠の発達もよく、健全に生育している。大クスの周囲は御影石により囲われており、土壌表層の根張りが制限されていることは根の生育に好ましいとは言えないが、現在の樹勢は旺盛であり特に問題とはなっていない。

社殿を取り囲む台地の東、北、西側の急斜面はスダジイ、タブ、ケヤキなどの大木群からなる広葉樹林に覆われており、シダ類などの下層植生や着生植物

も豊富で、極相に近い天然林であり、幹の腐朽は進んでいるが、樹冠の生育状態は悪くない。

一方、愛宕神社のある一段低い島状の部分は、東側は神崎神社社殿周囲と同様のシイ、タブなどからなる広葉樹林であるが、西面は植栽されたスギの大木が林冠を構成している。この南西斜面のスギに衰退、枯損が目立ち、疎林化している。立ち枯れたスギ大木が多くみられ、うち1本は、主幹が腐朽して隣接木に倒れ掛かっており、倒木の危険がある。生き残っているスギの樹勢も衰退しており、枝枯れのため樹冠幅が小さくなっている。上層木であるスギの枯れに伴って、低木層のヤブツバキ、ヒサカキ等が繁茂し、林床の光環境が悪化していて草本類は非常に少ない。また、スギがなく広葉樹が林冠を占める東面でも、上部の神崎神社周囲の斜面に比べると林床植物が少なく、土壌が乾燥している印象がある。スギの枯損は、おそらく西斜面のコンクリート補強工事に伴う根の傷害や土壌の乾燥による水収支の悪化によるものと思われ、南西端から衰退が始まり、隣接するスギの衰退・枯死により隣接木への日当たり、風当たりが強まるという順序で、次第に斜面上部（北東）へとスギの衰退・枯死が拡大しつつあるものと推察される。南西面はスギが林冠の多くをしめているためスダジイやタブなどによる林冠の修復は当面、期待できない。

## 8 保護・管理について

スギの衰退、枯損を防止することは困難と思われる。既に枯死したスギの腐朽木の倒壊には十分注意する必要がある。参拝者や崖下の住宅への落下等の被害を防ぐため、腐朽した枯死木は伐倒、撤去する必要がある。疎林化した部分については、天然実生による高木林が成立するにはかなり時間を要すると思われるが、スギ苗の補植による修復等の積極的な関与を行うかどうかは、神社や周辺住民の意向による。

南西面以外は、林冠木の生育に問題がなく、通常の手入れ等の管理を継続すればよく、特段の措置は必要ない。



写真1 大クス（なんじゃもんじゃ）

社殿右奥に見える巨大な樹冠が大クス（クスノキ）の萌芽幹群のもので、生育は旺盛である。根元は御影石で囲われているが、生育に支障はでていない。

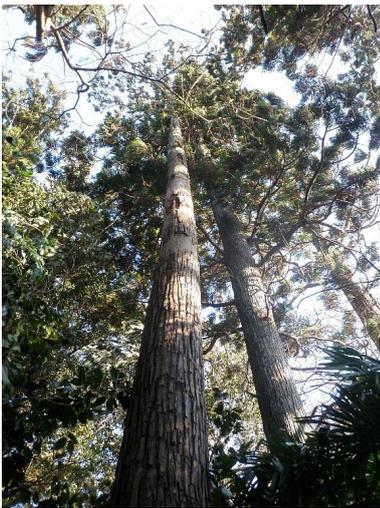


写真2 スギ枯死木

愛宕神社から神崎神社へつづく参道の西側にはスギ立枯れ木が多い。スギ枯死木が隣接木に倒れ掛かった状態のものもあり、危険である。



写真3 南正面からの神崎森遠景

南西側の斜面はスギ枯死木が林立している。斜面下部法面のコンクリート工事の影響と思われる。